

まるで何かの玩具のような尻尾が力なく、右に左にと風に逆らい揺れているのが見える。

岩肌の中に挟まれた、湖と呼ぶには些か小さい水辺のほとりに尻尾の主が膝を抱え座っていた。横で慰める様にその肩を叩くのはセシル。

今日の進軍を終え、何時もの様に結界を張りきたのだが、どうやら目的地に先客がいたらしい。明らかに肩を落としている様子の盗賊にさて、どうしたものかと遠巻きに様子を眺めた。

「へこむって何度見ても」

「まあまあ、そう言わないで」

静かなせいもあり、声はぎりぎり可聴範囲内の様だ。

「慣ればほら、きつとどこうってこと」

「無理だつて！というか慣れたくねーよ！セシル顔が苦笑つてるじゃねーか！」

「あ、や、そ、そうかな？」

「もーなんとかしてくれよあの変態パンツ男——!!」

…理解した。色々。

今日、最後に交戦した時には二部隊に別れた。私とあの盗賊は別の隊であつて、こちら側と交戦した相手に件のパンツ男が居なかつたという事は、おそらく向こうに居たのであろう。何が起つたのかは解らぬが、何を思ったのかは…想像がつく。

あのパンツ…否、クジャは相当あの盗賊に執着している。執着というよりも嫉妬じみた憎悪だ。人間には良く有る種類の感情とはいえ、あの男の物は粘着質な上に自己愛に満ちた芝居が掛かり、一種独特の狂気を醸して

いる。並の人間ならそんなものを向けられては、とてもまともでは居られない。が、どうやら…盗賊にとつてはあの装束の衝撃のほうが、それを遥かに凌駕するらしい。

「もーさ、正直あの性格に関しては諦めつけるよ。俺が構わなきゃいいだけなんだからさ。あれだけ！あの格好さええなとかしてくれば!!空に浮かんで腰に手を当て風になびかせて『ほーら、綺麗だろう?』とかありえね——!!」

耐えられないとばかりに尻尾が毛並みを逆立てる。まあ、確かに無いとは思うが、腹の座つた少年だ。普通なら性格の方が問題な気もするが、それは私だけの感想なのだろうか。

「諦めとか、そんな風に言っちゃ駄目だよジタン。お兄さんだろう?きつと何か事情があるんだ、理解してあげなきゃ」

「どんな事情だよ——!!!」

耳を劈く突つ込みに、思わず私もセシルも仰け反つた。

「あ、兄さん」

仰け反つた拍子に私を見つけたらしい。言われて正気に戻つたらしい盗賊もこちらを振り向いた。と、そのまま高速エアダッシュでこちらに突っ込んで来る。不意を突かれさすがに怯んだが、この盗賊の俊敏さを持つてされると身じろぐ事くらいしかできない。私の腰の下程しかない盗賊はそのまま外套を掴んで…絶叫した。

「頼む!!その鎧ちよつとわけてくれーそんだけ着てれば少し位いいだろう!!下半身だけわけてくれえええ!!」

「あの体軀では着れなからう。重さで潰れる。」

「ちよつ…ジタン落ち着いて！兄さん普通に返答しないで!!下半身だけ取られちゃつたら兄さんがどうなるんだよ!!」

「じゃあ前垂れ、前垂れだけ——!!」

「なんかその方が危険だつては——!!」

ちよつとも正気に戻つていなかった。大混乱する二人に軽く拳骨をいれて正気に戻してやらねば、危うく前垂れを盗まれる所だつた。

再び腰を下ろした盗賊がバツが悪そうに頭を掻く。こちらも腰を下ろしているセシルの横で、私は触媒石を湖に投げ入れた。

「済まん。立ち聞くんも何も無かつたのだが」

「あー、いや、いいよ。…こつこそ、びつくりさせて悪かつたな」

ややあつて石は淡く光る。ジェクトの設置も終つたようだ。軽く念をかける湖から薄い魔法幕が立ち上がる。

「あー、結界か。邪魔して悪かつたな」

「そのつもりも無かつたのだから。構わぬ。只、装備品を盗むのは勘弁してもらいたいものだな」

「わ、悪かつたつては」

冗談めかして付け足してやれば、再び頭を掻く。が、直ぐに俯き異様に深い溜息を吐いた。

「…セシルはいいよなあ。なんか兄ちゃんカッコよくて」

「え？」

戸惑う様に返事をしたセシルが私を見るが、一体私に何を思えというのだろうか。

結局、私はセシルの横に座っている。曲がりなりにも自分が話題に上つてしまえば逃げを打つ訳にも行かず、何よりセシルが小首を傾げて「助けて?」という視線を送つて寄越してしまえば助けられない訳にはいかない。どんな些細な事でも私はセシルを見捨てたり等出来ないのだ。いや、病状めいているのは言わずもがな判つている。

セシルを挟んだ反対にいる盗賊は完全に膝に顔を埋めている。精神状態は悪化したようだ。

「…なんでああなのかな」

「な、なんでだろうね…?」

比較してしまつて余計落ち込んだのだろう。詮の無い事をするものだ。

「そりゃあさ、あいつはあいつなりに大変な人生送つたかもしれないけどさ。だからつて下脱ぐ事はないだろう。意味わかんねーよ」

「そ、そうだね…なんでだろうね兄さん…兄さん？」

セシルがこちらを見て再び首を傾げた。私が怪訝に思つていたのが伝わつたらしいのだが、その仕草はやめなさいと…いや、まあ今は置いておこう。

「私は、そなたがその点以外を気に留めていないという事の方が不思議だなかな」

「ええ？」

気抜け、間延びた声で盗賊が顔を上げた。

「他の人間ならそれよりも他の質を問題視すると思うのだがな。どうなのだろう。」

正直、見て呉れに対する執着は私にはよく解らない。

「どうっていわれりゃ…まあ、確かに問題はあるけど、今更っていうか、もう慣れたつていうか、それは追々なんとかなるかなつていうか…」